

令和6年度
授業評価結果報告書

群馬県立県民健康科学大学

内部質保証委員会

F D 部会

I R 部会

令和6年度 授業評価報告書

1. 授業評価の概要

1. 1 授業評価の趣旨

授業評価の目的は、各教員が授業の内容および方法を改善し、教育の質を向上させることである。本学では平成22年度から、学生による授業評価とそれに基づいた教員の自己評価を組み合わせる形で授業評価を開始し、双方の評価結果を学生と教員が共有することで、この目的達成に取り組んでいる。

1. 2 学生による授業評価

1. 2. 1 調査票について

平成29年度より学修支援システム manaba（以下、manaba とする）を活用した授業評価アンケート調査が開始された。本年度も「講義」「演習」「実習」「実験」の4種類の授業形態毎の調査を継続し実施した。授業評価アンケートは、manaba マイページの最上部に、学生が履修している授業形態別にアンケートのリストが表示され、履修者のみが閲覧でき、授業科目名を選択し回答する仕組みである。アンケートの冒頭には、授業評価アンケートの趣旨「教員が学生による授業評価結果を把握し授業改善・向上に活用すること」が示され、個人情報保護の観点を含む倫理的配慮として集計における回答者の個人情報の匿名化が明示され、学生への協力依頼がなされている。

Web システムによるアンケート導入により質問形式の自由度が拡大したことから、平成30年度より授業評価アンケートの内容は、学生の回答を通して教員が自身の改善点を明確に把握できる質問内容に改訂された。アンケートの大項目は、学生の授業に対する理解度・目標の達成度の確認、理解度・達成度が十分でない場合の理由、授業に対する取り組み姿勢・準備状況、教員側の自己学修の促進、成績評価の明確さ、授業の満足度と良かった点・改善点を問う構成である。回答には原則として5件法を採用した。

令和2年に保健師助産師看護師学校養成所指定規則及び「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」、また令和3年に診療放射線技師養成所指定規則及び「診療放射線技師養成所指導ガイドライン」が一部改正され、令和4年度から改正カリキュラムが適用されることとなった。この改正に伴い、令和3年度にはアンケート項目を検討し、令和4年度に一部変更を加えた。この変更は、学生が主体的な学修に取り組むことの重要性が高まっている大学教育の現状を踏まえ、授業評価の質と精度を向上させるために行った。具体的には、質問の項目および順序、分類を見直し、教員と学生の双方がより効果的に授業内容を評価・改善できるよう調整した。これにより、質問の表現がより明確になり、授業形態にかかわらず質問項目が統一された。また、類似する質問項目は統合され、実習では教員を主に評価対象とする選択肢を設定した。さらに、自己学修を行ったかどうかについても、それぞれの授業形態に応じた必要な自己学修時間を確認した上で回答を求めるようにした。これらの変更は、学生の学修態度の改善や学修成果の向上に寄与するものである。令和6年度は質問項目及び回答の選択肢を検討し、経年変化が検討できるように概ね前年度と同様の質問項目及び選択肢とした。改善点については、学生の視点により、どのような工夫や方法があるかを具体的に記述できる質問項目に変更した。

次ページ以降、授業形態別の授業評価アンケート評価項目を表1に示した。

表 1-1 授業評価における評価項目 <講義>

	分類	項目 No.	評価項目
講義	講義に対する取り組み姿勢・準備状況、目標達成度	①	シラバス等を参考に、授業の目的や目標、各回のテーマを理解した上で講義を受けましたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
		②	わからない点は、教員・友人に質問したり、教科書等で調べるなど積極的に解決しようとしたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
		③	単位認定には自己学修時間（講義 1 単位あたり 30 時間）が必要です この講義に対して週平均どのくらい自己学修をしましたか 1. ほとんど行わなかった 2. 30 分程度 3. 1 時間程度 4. 2 時間程度 5. 3 時間以上
		④	講義の内容を理解し、授業の目標を達成できたと思いますか 1. まったく達成できなかった 2. あまり達成できなかった 3. おおむね達成した 4. 十分達成した 5. 非常に高いレベルで達成した
	講義の目標達成度が十分でない場合の理由	⑤	前項④で 1 又は 2 と回答した方は、十分達成できなかった理由を複数回答で選んでください。 1. 勉強が足りなかった 2. 講義の目的・目標が明確でなかった 3. 話し方が聞き取りにくかった 4. 教材・器具、資料（量・質）が適切でなかった 5. 講義中の課題等に対する指示が明確でなかった 6. 講義の時間配分が適切ではなかった 7. 学生の理解度の確認が十分でなかった 8. 質問・意見が気軽にできなかった 9. レポートや提出物等に対するフィードバックが十分でなかった 10. 学生の自主性が尊重されなかった 11. シラバスに記載されている内容を授業で扱わなかった 12. 説明や指導が熱心でなかった 13. 討議等の活動を取り入れなかった 14. 教員間の連絡、指導内容の調整等が十分でなかった 15. 講義に集中できる環境を調整しなかった 16. その他（ ）
		⑥	前項⑤で 16 を選んだ方は、具体的な理由を記入してください
	自己学修の促進、成績評価の明確さ	⑦	講義にあたり自己学修を促す工夫（レポート・小テスト、manaba の利用など）がされていたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
		⑧	成績評価の方法と基準は明確でしたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
	講義内容の満足度、良かった点・改善点	⑨	総合的にみて、この講義に満足できましたか 1. 全く満足できなかった 2. あまり満足できなかった 3. どちらともいえない 4. 満足できた 5. 十分満足できた
		⑩	この講義の良かった点、改善点について、具体的に記入してください。改善点がある場合はどのような工夫や改善点があると考えますか

表 1－2 授業評価における評価項目 <演習>

	分類	項目 No.	評価項目
演習	演習に対する取り組み姿勢・準備状況、目標達成度	①	シラバス等を参考に、授業の目的や目標、各回のテーマを理解した上で演習を受けましたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
		②	わからない点は、教員・友人に質問したり、教科書等で調べるなど積極的に解決しようとしたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
		③	単位認定には自己学修時間（演習 1 単位あたり 15 時間）が必要です この演習に対して週平均どのくらい自己学修をしましたか 1. ほとんど行わなかった 2. 30 分程度 3. 1 時間程度 4. 2 時間程度 5. 3 時間以上
		④	演習の内容を理解し、授業の目標を達成できたと思いますか 1. まったく達成できなかった 2. あまり達成できなかった 3. おおむね達成した 4. 十分達成した 5. 非常に高いレベルで達成した
	演習の目標達成度が十分でない場合の理由	⑤	前項④で 1 又は 2 と回答した方は、十分達成できなかった理由を複数回答で選んでください。 1. 勉強が足りなかった 2. 演習の目的・目標が明確でなかった 3. 話し方が聞き取りにくかった 4. 教材・器具、資料（量・質）が適切でなかった 5. 演習中の課題等に対する指示が明確でなかった 6. 演習の時間配分が適切ではなかった 7. 学生の理解度の確認が十分でなかった 8. 質問・意見が気軽にできなかった 9. レポートや提出物等に対するフィードバックが十分でなかった 10. 学生の自主性が尊重されなかった 11. シラバスに記載されている内容を授業で扱わなかった 12. 説明や指導が熱心でなかった 13. 討議等の活動を取り入れなかった 14. 教員間の連絡、指導内容の調整等が十分でなかった 15. 演習に集中できる環境を調整しなかった 16. その他（ ）
		⑥	前項⑤で 16 を選んだ方は、具体的な理由を記入してください
	自己学修の促進、成績評価の明確さ	⑦	演習にあたり自己学修を促す工夫（レポート・小テスト、manaba の利用など）がされていたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
		⑧	成績評価の方法と基準は明確でしたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
	演習内容の満足度、良かった点・改善点	⑨	総合的にみて、この演習に満足できましたか 1. 全く満足できなかった 2. あまり満足できなかった 3. どちらともいえない 4. 満足できた 5. 十分満足できた
		⑩	この演習の良かった点、改善点について、具体的に記入してください。改善点がある場合はどのような工夫や改善点があると考えますか

表 1－3 授業評価における評価項目 <実習>

	分類	項目 No.	評価項目
実習	実習に対する取り組み姿勢・準備状況、目標達成度	①	シラバス等を参考に、授業の目的や目標、各回のテーマを理解した上で実習を受けましたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
		②	わからない点は、教員・友人に質問したり、教科書等で調べるなど積極的に解決しようとしたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
		③	単位認定上の自己学修時間は設けていませんが、授業の性質上、事前・事後学修は必要です。この実習に対して週平均どのくらい自己学修をしましたか 1. ほとんど行わなかった 2. 30 分程度 3. 1 時間程度 4. 2 時間程度 5. 3 時間以上
		④	実習の内容を理解し、授業の目標を達成できたと思いますか 1. まったく達成できなかった 2. あまり達成できなかった 3. おおむね達成した 4. 十分達成した 5. 非常に高いレベルで達成した
	実習の目標達成度が十分でない場合の理由	⑤	前項④で 1 又は 2 と回答した方は、十分達成できなかった理由を複数回答で選んでください。 1. 勉強が足りなかった 2. 実習の目的・目標が明確でなかった 3. 話し方が聞き取りにくかった 4. 教材・器具、資料（量・質）が適切でなかった 5. 実習中の課題等に対する指示が明確でなかった 6. 実習の時間配分が適切ではなかった 7. 学生の理解度の確認が十分でなかった 8. 質問・意見が気軽にできなかった 9. レポートや提出物等に対するフィードバックが十分でなかった 10. 学生の自主性が尊重されなかった 11. シラバスに記載されている内容を授業で扱わなかった 12. 説明や指導が熱心でなかった 13. 討議等の活動を取り入れなかった 14. 教員間等の連絡、指導内容の調整等が十分でなかった 15. 実習に集中できる環境を調整しなかった 16. その他（ ）
		⑥	前項⑤で 16 を選んだ方は、具体的な理由を記入してください
	自己学修の促進、成績評価の明確さ	⑦	実習にあたり自己学修を促す工夫（レポート・小テスト、manaba の利用など）がされていたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
		⑧	成績評価の方法と基準は明確でしたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
	実習内容の満足度、良かった点・改善点	⑨	総合的にみて、この実習に満足できましたか 1. 全く満足できなかった 2. あまり満足できなかった 3. どちらともいえない 4. 満足できた 5. 十分満足できた
		⑩	この実習の良かった点、改善点について、具体的に記入してください。改善点がある場合はどのような工夫や改善点があると考えますか

表 1-4 授業評価における評価項目 <実験>

	分類	項目 No.	評価項目
実験	実験に対する取り組み姿勢・準備状況、目標達成度	①	シラバス等を参考に、授業の目的や目標、各回のテーマを理解した上で実験を受けましたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
		②	わからない点は、教員・友人に質問したり、教科書等で調べるなど積極的に解決しようとしたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
		③	単位認定上の自己学修時間は設けていませんが、授業の性質上、事前・事後学修は必要です。この実験に対して週平均どのくらい自己学修をしましたか 1. ほとんど行わなかった 2. 30分程度 3. 1時間程度 4. 2時間程度 5. 3時間以上
		④	実験の内容を理解し、授業の目標を達成できたと思いますか 1. まったく達成できなかった 2. あまり達成できなかった 3. おおむね達成した 4. 十分達成した 5. 非常に高いレベルで達成した
	実験の目標達成度が十分でない場合の理由	⑤	前項④で1-2と回答した方は、十分達成できなかった理由を複数回答で選んでください。 1. 勉強が足りなかった 2. 実験の目的・目標が明確でなかった 3. 話し方が聞き取りにくかった 4. 教材・器具、資料（量・質）が適切でなかった 5. 実験中の課題等に対する指示が明確でなかった 6. 実験の時間配分が適切ではなかった 7. 学生の理解度の確認が十分でなかった 8. 質問・意見が気軽にできなかった 9. レポートや提出物等に対するフィードバックが十分でなかった 10. 学生の自主性が尊重されなかった 11. シラバスに記載されている内容を授業で扱わなかった 12. 説明や指導が熱心でなかった 13. 討議等の活動を取り入れなかった 14. 教員間等の連絡、指導内容の調整等が十分でなかった 15. 実験に集中できる環境を調整しなかった 16. その他（ ）
		⑥	前項⑤で16を選んだ方は、具体的な理由を記入してください
	自己学修の促進、成績評価の明確さ	⑦	実験にあたり自己学修を促す工夫（レポート・小テスト、manabaの利用など）がされていましたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
		⑧	成績評価の方法と基準は明確でしたか 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 強くそう思う
	実験内容の満足度、良かった点・改善点	⑨	総合的にみて、この実験に満足できましたか 1. 全く満足できなかった 2. あまり満足できなかった 3. どちらともいえない 4. 満足できた 5. 十分満足できた
		⑩	この実験の良かった点、改善点について、具体的に記入してください。改善点がある場合はどのような工夫や改善点があると考えますか

1. 2. 2 授業評価の実施方法

授業評価アンケートは、セメスター終了後の単位認定試験期間を目処に、manaba 上で公開され、学生に対して積極的な回答協力に向けて、回答しても匿名性が確保され、不利益を被らないことを前提として、口頭、メール、manaba による広報を行った。また、単位認定試験後に実習が予定されている科目など授業期間が異なる場合には、アンケート公開期間の延長等により対応した。

授業評価は、原則として授業最終日の授業時間を活用し、授業担当教員から学生に対して授業評価の依頼と回答方法を説明しアンケートを実施した。令和 6 年度は、通常の対面授業を行った。また、感染症の流行等に留意しながら、臨地実習については、臨地実習施設の受け入れ状況を確認し、実習方法は担当教員と臨地実習指導者が協議して行った。アンケート回答率の向上を目指し、授業担当教員による学生への授業評価の依頼や回答方法の説明に加えて、FD 部会では manaba コースニュースを活用した授業評価協力依頼のアナウンスの強化、最終回の授業時間内における回答時間の設定、セメスター半期の授業に対する終了時期にあわせた設定、単位認定試験終了後までの回答期間の設定等、依頼方法や実施方法を工夫した。これらの工夫により、依頼方法や実施方法の改善を図り、学生の協力を促した。

授業評価アンケートは、個人が特定されないシステムを採用しており学生に不利益が及ぶことはない。また、アンケートの回答は学生の自由意思によるものとして保障されている。なお、manaba による調査結果の集計は事務局が担当し、教員は関与していない。

1. 3 教員による授業評価報告書

教員による授業評価報告書は、学生による授業評価の集計結果及び自由記述内容を受けて、下記の 3 項目に沿って作成する。

- 1) 学生による授業評価のアンケート調査結果についての意見・感想
- 2) 実施した授業方法・工夫に対する評価
- 3) 授業に対する総合的評価と改善点

1. 4 授業評価結果の集計方法

学生による授業評価結果及び教員から提出された授業評価報告書は、科目区分別に、「教養教育科目」、「看護学部 専門基礎科目・専門科目」、「診療放射線学部 専門基礎科目・専門科目」に区分して集計した。なお、本年度は専門教育科目の合同科目については、各学部の区分に含め集計した。また、調査用紙は授業形態別に「講義」「演習」「実習」「実験」毎に作成されているため、それぞれ区分別に集計した。

2. 学生による授業評価の実施状況

2. 1 授業評価の実施科目数と学生の回答率

表 2 に、令和 6 年度開講科目の学生による授業評価の実施状況、表 3 に、学生による授業評価の回答率を示す。表 2 のとおり、令和 6 年度に開講した全科目が授業評価アンケートを実施していた。

また、表 3 のとおり、科目区分別に、学生による授業評価の回答率を比較した結果、診療放射線学部の専門基礎・専門科目が 58.3%と最も高く、次いで、教養教育科目が 53.8%であった。さ

らに、授業形態別に回答率を比較した結果、実験が 56.9%と最も高く、次いで、講義が 56.1%であった。

授業評価アンケートへの manaba の活用は8年目となるが、全体的な平均回答率は令和元年度 44.5%、令和2年度 46.7%、令和3年度 53.8%、令和4年度 58.0%、令和5年度 54.3%、令和6年度 48.9%と推移した。これは、令和4年度の 58.0%をピークにやや減少傾向にあるものの、COVID-19 感染拡大以前の水準までには低下していないことを示す。教養教育科目の回収率は前年度 54.0%と比較し 53.8%と横ばいであった。看護学部では前年度 50.0%と比較すると 42.8%であり、演習の回答率が低くなっている。診療放射線学部は前年度 63.0%に比較すると 58.3%であり、実習の回答率が低くなっている。

表2 令和6年度 学生による授業評価の実施科目数

科目区分	教養教育科目		看護学部 専門基礎・専門科目		診療放射線学部 専門基礎・専門科目		合計	
	実施	対象	実施	対象	実施	対象	実施	対象
講義	22	22	26	26	37	37	85	85
演習	21	21	20	20	16	16	57	57
実習	-	-	18	18	12	12	30	30
実験	-	-	-	-	4	4	4	4
合計	43	43	64	64	69	69	176	176
実施率	100%		100%		100%		100%	

表3 令和6年度 学生による授業評価の回答率 (%)

科目区分	教養教育科目			看護学部 専門基礎・専門科目			診療放射線学部 専門基礎・専門科目			平均回答率
	回答数	履修者数	回答率	回答数	履修者数	回答率	回答数	履修者数	回答率	
講義	706	1218	58.0%	878	1868	47.0%	877	1303	67.3%	56.1%
演習	178	426	41.8%	562	1500	37.5%	261	438	59.6%	42.3%
実習	-	-	-	582	1360	42.8%	103	386	26.7%	39.2%
実験	-	-	-	-	-	-	82	144	56.9%	56.9%
合計 (平均)	884	1644	53.8%	2022	4728	42.8%	1323	2271	58.3%	48.9%

2. 2 学生による授業評価の得点状況

集計可能な授業評価項目は、次の7項目である。

項目①：シラバス等を参考に、授業の目的や目標、各回のテーマを理解した上で講義を受けましたか。

項目②：わからない点は、教員・友人に質問したり、教科書等で調べるなど積極的に解決しよう
としましたか。

項目③：単位認定には自己学修時間（講義1単位あたり30時間）が必要です。この講義に対して週平均どのくらい自己学修をしましたか。

項目④：講義（又は演習、実習、実験）の内容を理解し、授業の目標を達成できたと思いますか。

項目⑦：講義（又は演習、実習、実験）にあたり自己学修を促す工夫（レポート・小テスト、manabaの利用など）がされていたか。

項目⑧：成績評価の方法と基準は明確でしたか。

項目⑨：総合的にみて、この講義に満足できましたか、である。

図1から図3に、これら7項目に対する学生による評価得点を科目区分別に示し、それぞれの図に、授業形態別のグラフを示した。評価得点は、概ね4点程度であった。最も高かった項目は、診療放射線学部的项目②（分からない点の積極的解決）の平均4.38であった。次いで、看護学部的项目②（分からない点の積極的解決）、項目⑦（自己学修時間を促す工夫）の平均4.29であった。

反面、項目③（自己学修時間）の得点は、教養教育科目、両学部の専門基礎・専門科目いずれも低い結果を示した。表4に、項目③（自己学修時間）の得点の平均値を科目区分別・授業形態別に示す。表4のとおり、教養教育科目2.5、看護学部3.3、診療放射線学部3.5となり、全体の平均値は3.5であった。授業形態別では、最も高いのは診療放射線学部の実験4.6、次いで看護学部の実習3.8であった。一方、最も低いのは教養教育科目の講義および演習2.5であった。

図4に、科目区分別にみた自己学修時間に関する評価得点の過去5年間の推移を示す。令和2年度は、COVID-19感染拡大による大きな影響を受けた年であった。この年、多くの科目がオンライン授業を導入し、学修支援システムmanabaを通したレポート課題の提出等を課すようになった。その結果、令和2年度自己学修時間は令和元年度のそれと比較し、全ての科目区分にて延長した。具体的には、教養教育科目が3.20（令和元年2.20）、看護学部3.30（令和元年2.70）、診療放射線学部3.30（令和元年2.70）となった。それ以降令和6年度まで、変動はありつつも、COVID-19感染拡大以前の水準までには自己学修時間は短縮していない。また、項目⑦（自己学修時間を促す工夫）の得点は、教養教育科目3.98、看護学部の専門基礎・専門科目4.29、診療放射線学部の専門基礎・専門科目4.27と高く、授業にあたっての自己学修を促す工夫がなされており、この工夫が自己学修時間に影響している可能性を示唆した。

さらに、項目⑨（満足度）について科目区分別に平均値をみると、図1・2・3のとおり、平均値は教養教育科目4.24、看護学部4.25、診療放射線学部4.43といずれも4（満足できた）以上であった。さらに、図5に科目区分別にみた満足度の過去5年間の推移を示す。項目⑨（満足度）の得点は、COVID-19感染拡大による大きな影響を受けた令和2年度以降、変動はありつつも、それ以前の水準を維持していることを示す。令和2年度から令和4年度まではCOVID-19感染拡大による影響を受け、対面授業を実施できない期間を含んでいた。令和5年度は通常授業が実施できるようになり、平均値は安定した。これは、授業の正常化が学生の満足度向上に寄与した可能性を示している。

図1 令和6年度 教養教育科目の学生による授業評価得点

(回答数：講義 706、演習 178)

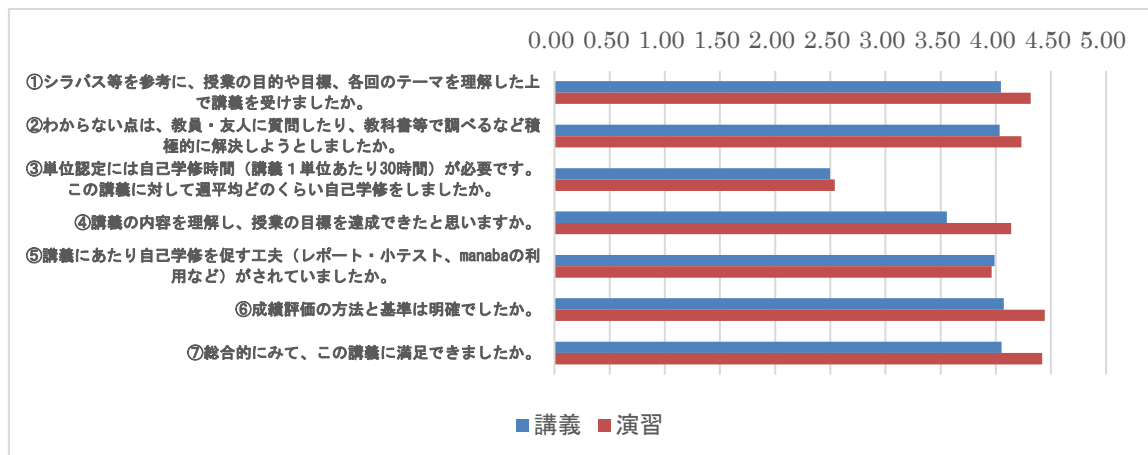


図2 令和6年度 看護学部 専門基礎科目・専門科目の学生による授業評価得点

(回答数：講義 878、演習 562、実習 582)

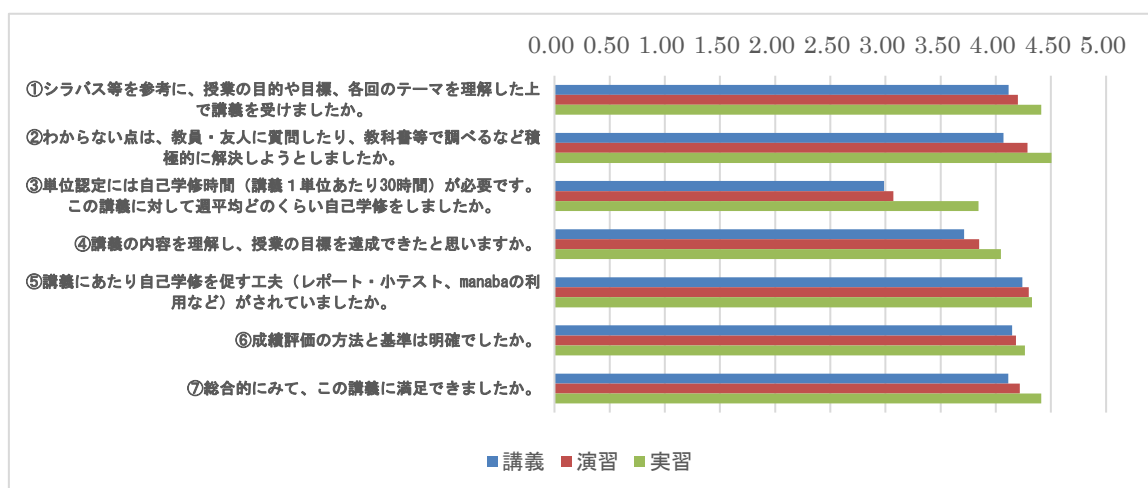


図3 令和6年度 診療放射線学部 専門基礎科目・専門科目の学生による授業評価得点

(回答数：講義 877、演習 261、実習 103、実験 82)

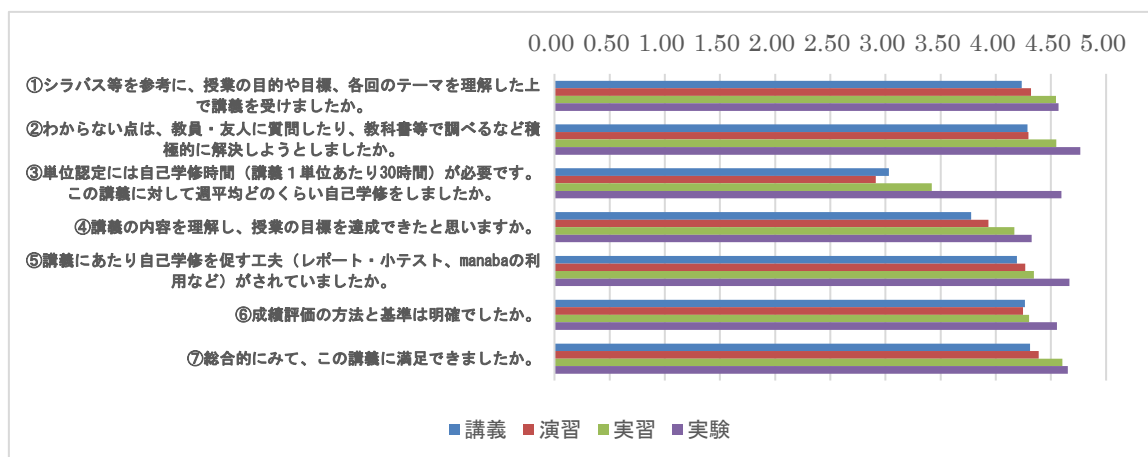


表4 令和6年度 自己学修時間に関する評価得点の平均値

	教養教育科目	看護学部 専門基礎・専門科目	診療放射線学部 専門基礎・専門科目	平均
講義	2.5	3.0	3.0	2.8
演習	2.5	3.1	2.9	2.8
実習	-	3.8	3.4	3.6
実験	-	-	4.6	4.6
平均	2.5	3.3	3.5	3.5

図4 令和6年度 自己学修時間に関する評価得点の平均値の推移

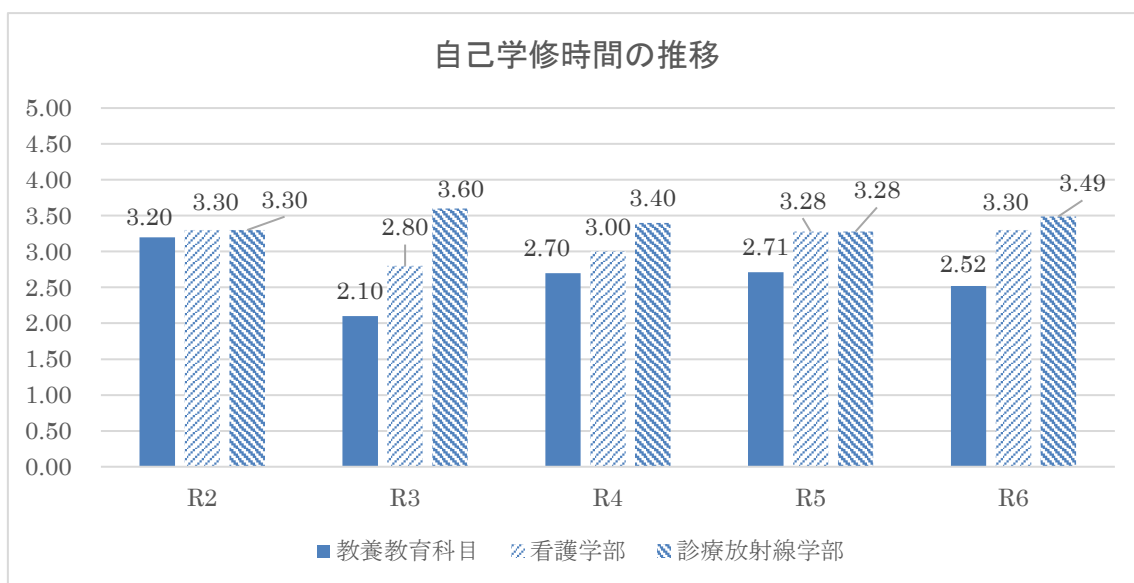
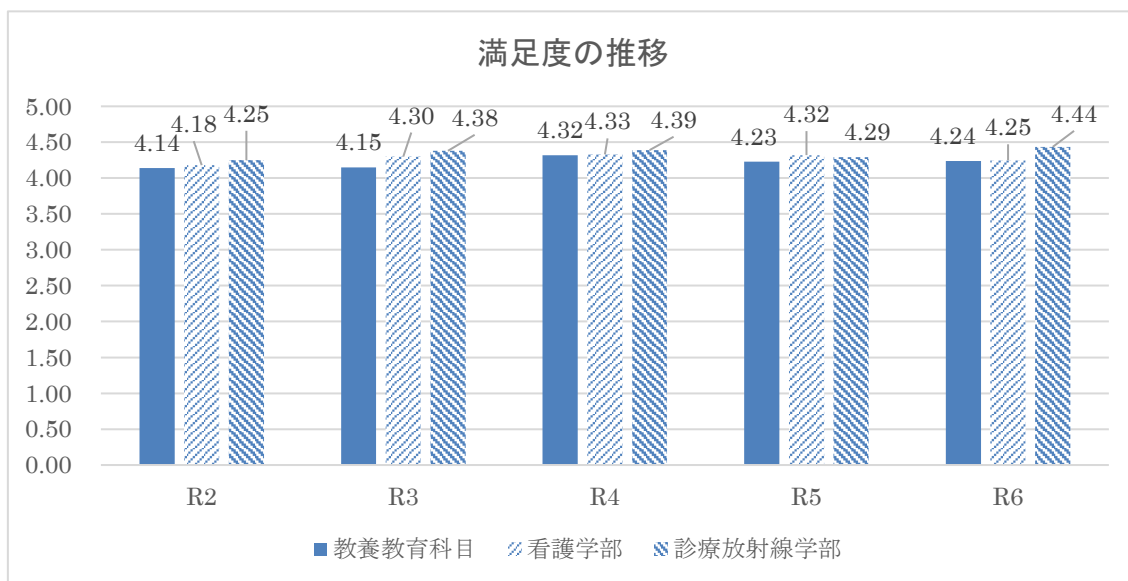


図5 令和6年度 満足度に関する評価得点の平均値の推移



2. 3 自由記述内容

学生による授業評価は、記載した個人が特定されないよう匿名性が確保されている。従って、アンケートには、授業に関する学生の率直な意見・感想が記述されており、自由記述の多くは学生主体の授業への興味・関心からの感想が多くを占めた。その一方、授業評価とは無関係な内容も散見された。しかし、本アンケートは授業を担当した教員にとって、学生の視点を通して自己の授業を振り返り、授業の改善・向上に資するための貴重な資料である。そのため、自由記述の集計・整理においては、授業評価とは無関係とも考えられる記述内容も学生のありのままの評価として取り扱った。記述内容は類似した内容を項目に分類し、主要な内容を以下に示した。

(1) 学修意欲や理解度の高まりを予期させるもの

- 学ぶ事柄に対して、具体的な例と結び付けて授業を行った点がよかった。また、生徒の質問に対して、丁寧に分かりやすく答えてくれた点もよかった。
- ただ知識を教えるのではなく、最近の時事を含めて講義をしていたのでわかりやすかった。
- グループワークがあることで普段話したことのない人とも話せて、新たな意見を知ることができた。
- 事前学習課題が毎回あったことで、次回どのような内容をするのかがイメージが湧きやすかったです。
- 授業の中で学生と目を合わせていたり、クイズ形式の問題をするなどしており、聴いているだけの授業でなくて良かった。
- 経験に基づいた話をしくれたので、実際の診療放射線技師の仕事について詳しく知ることができた。
- 毎回復習があったが、その際に手を差し伸べてくれて、答える人を一人にしない感じがすごく良かった。
- 実験前に実験内容に必要な知識を詳しく復習する時間がとても役に立った。
- 全ての人に平等に成績をつけていて良かった。ちゃんと勉強した人が解けるような問題でよかった。

(2) 学生が興味を示した教材や手法

- 群大で実習を行うにあたり、事前学習をしたり実物を目の前にしたことで、人体の構造をより詳しく理解できたことが良かった。
- レジュメの形式が各期とも統一されていたため、自己学修にとっても助かりました。
- 実際にグループでプレパレーションをしたことで、実習のイメージが湧きました。
- 臨床工学技士さんの講義のなかで NPPV や HOT の実物を見ることができて、実習においてもこの講義が役にたった。
- 実際の疾患体験、家族の DVD や排尿日誌といった、自分たちで体験してみることが理解につながると感じたので、ぜひ今後も実施してほしい。
- 講義の動画がオンデマンドで配信されていたため、テスト前の復習に役立った。
- 教科書に書いていない内容をたくさん話していただいたので講義を聴きに行く意味があると思えた。
- 実験は個人ではなく班の人と協力することによって分からないところが分かるようになった。

(3) 教員の努力を要求するもの

【授業展開】

- 話しっぱなしの授業はあまり好きではないです。
- 内容が難しすぎるのか、よく理解ができなかった。
- もう少しどこを説明しているのかを学生に示した方が良いのではないかと感じた。またエクササイズの答えのスライドを長く見せたり作ったりすべきと感じた。
- 発言の統一性がないことが毎回の授業であるのは本当に困ります。
- 講義時間の過剰な延長のため昼食時間が十分に確保できないことがあった。体制を見直すか事前の予告は学生側の予定にも影響を与えるため必須だと思う。
- 初めて聞く専門用語をたびたび使うことがあり理解しにくかった。
- 半期だけで行うにはあまりにも量が多すぎる。通年でやるべきだと思う。
- 実験の予備日が初日にきてしまっていたので、実験をしていないのにレポート日を設けられてもレポート日として全く機能していなかった。

【教材】

- レポートがちょっと多くて大変だった。授業後に出されるミニレポートは字数がもう少し少なかったら良いなと思いました。
- グラフの出てくる回は難しいところが多くて理解できないところが多々あった。
- レジュメの文字が小さいので、もう少し大きめにしてほしい。
- スライドをめくるのが速いときがあって追いつかないときがある。
- レジュメをPDFで送ってほしい。

【教員の姿勢・態度】

- 各期だけではなく教員によっても方針の違いがあり、カンファレンスなどで困惑することがあったので、教員同士でもよく話し合いをして同じような方針にしてほしかったと思います。
- テストが始まる2日前にテスト範囲を送ってきたことに関しては怒りを覚えました。もう少し学生の気持ちを考えて欲しい。
- 担当教員から伝えられた時間配分で資料の作成を進めたが、時間配分を考えるとパワーポイントの内容を変えざるを得なかったにも関わらず、そのことに対する不満を担当教員に伝えると「それは知らない」と言われた。

【成績評価・課題】

- 生徒の成績に対して無責任のように感じた。また、そのような先生が私たちの成績を付けるということも正当に成績を付けてくれるのか不安を感じる。
- 教員が行動目標に書かれているカンファレンスは学生同士で行うものではなく医療従事者が行っているものと勘違いし、学生同士のカンファレンスを行わなかったと聞いた。カンファレンスをおこなっていないのにカンファレンスで達成される行動目標を評価されていたら不公平だと感じた。教員同士で行動目標の用語について確認してほしい。

(4) その他

- いろいろな立場からチーム連携について考えることができたほか、初めての診療放射線学部との合同授業だったので新鮮で楽しかったです。

3. 教員による授業評価の実施状況

3. 1 教員による授業評価報告書の提出科目数

表5に、令和6年度開講科目の教員による授業評価報告書の提出状況を示した。教員による授業評価報告書の提出率は97%（令和2年度97%、令和3年度97%、令和4年度97%、令和5年度96%）であり、高い水準を維持している。科目区分別でみると看護学部の専門基礎科目・専門科目の提出率が最も高く100%であった。

表5 令和6年度 教員による授業評価報告書の提出状況

科目区分	教養教育科目		看護学部 専門基礎・専門科目		診療放射線学部 専門基礎・専門科目		合計	
	実施	対象	実施	対象	実施	対象	実施	対象
講義	20	22	26	26	35	37	81	85
演習	19	20	20	20	16	16	55	56
実習	-	-	18	18	12	12	30	30
実験	-	-	-	-	4	4	4	4
合計	39	42	64	64	67	69	170	175
実施率	93%		100%		97%		97%	

3. 2 学生の授業評価に対する担当教員による授業評価報告書の記述内容

報告書の内容は、「学生による授業評価のアンケート調査結果についての意見・感想」、「実施した授業方法・工夫に対する評価」、「授業に対する総合的評価と改善点」の3つの視点に基づく記述である。主要内容の一部を以下に示した。

（1）学生による授業評価のアンケート調査結果についての意見・感想

- 自己学修は1時間から3時間以上迄が78%で、ほぼ想定の自己学修であった。
- 68%の学生が1時間以上の自己学修をして授業に臨んだ。全員が1時間以上の自己学修を行ってくれるよう、穴埋め形式の課題を作成したが、さらに課題の量を増やすことを確認したい。
- 当初、社会に出て無関係な事柄だと思っていたかもしれないが、異文化、多様化社会というものが、これからの生活の中で、無視していけないものだということを、概ね理解してもらえたと思う。
- 課題図書の特長と学んだ内容のレポート課題（課題図書を10冊推薦し興味関心に基づき自由に選択）とループリックを提示し、学修習慣を身につけられるようにした。その結果、多くの学生がmanabaへの学修内容の整理や積極的な質問ができるようになっていた。また、人間および人間の発達への理解に繋がる学びを得ていた。

- 回答中、自己学修0の学生がいますが、授業時間外でのレポート記載や、身体トレーニングの復習、セリフの暗記、役作り等、自己学修しなければ公開発表会（試験）には臨めないはずなので、学生自身がなにを自己学修ととらえているのかが不十分なのかなと感じました。同じ学生が、成績評価の方法と基準の明確さについて、どちらともいえないという回答なのも、学生の理解不足を感じます。いちおう時間はより伝わるよう、心掛けたいと思います。

（2）実施した授業方法・工夫に対する評価

- 看護過程の展開の演習については、学修内容の理解促進に向けた効果の観点から、生涯発達看護学全体で演習時期を検討するとともに、成人期と老年期で看護過程演習の時期が重複しないよう演習時期を集中的に連続週として授業計画を調整した。
- 毎回授業の終了時にアンケートと質問を提出させて、次回の授業のはじめにフィードバックを行った。授業の最後には内容についての確認テストや国試過去問を行った。看護師国家試験に出る代謝関係・栄養関係の問題は簡単なので学生には物足りないと思ったが、授業後のアンケートで難しいと感じる学生が意外と多かった。
- 看護倫理学は正解をもとめるのではなく、最善策を検討するプロセスであることから、例年グループワークを多く取り入れ、学生間でディスカッションを促してきた。それについて肯定的な自由記載内容が多く寄せられた。今後も取り入れていきたいと考える。
- 講義の終わりの10分間を使って小論文の書き方に関するミニ講義と演習を行った。
- 両学部合同のグループワークを入学後の早い段階で実施したことに対する自由記述数が大幅に減少した。サークル活動等が自由にできなかったコロナ禍を脱したことが一因の可能性がある。
- 授業の進め方については可能な限り双方向になるように進めたことから、学生から高い評価が得られたと考える。
- レポートの採点のフィードバックを早くするよう心がけた。

（3）授業に対する総合的評価と改善点

- 実際の授業の様子や、アンケート結果が示すように、全体的に学生は積極的に授業に取り組んでいたと思う。今後も、ペアやグループワークによる学修の機会を増やしながら、自主的な学修につながるよう改善に努めたい。
- 「学習内容の強調部分（重要箇所）の提示方法を教員間で統一してほしい」という意見もあった。この点については、教員がすべてを主導するのではなく、重要箇所が重要である理由を学生自身が考えるための機会になると考える。そのため、現状通り、授業を担当する教員の授業計画に沿って授業を行うこととする。
- （成績の低迷した）学生については、3年前期の学内演習時の看護過程課題についても完成度が低くなっていたため、夏休み中に課題の復習を促したり、参考書を紹介するなどして実習前の準備状況を高める必要がある。
- 自作のビデオコンテンツは学生の評判も良く、指導ツールとして有効であった。
- 毎回、全員が真面目に演習プリントに取り組んでくれたことに好感が持てた。
- 学生が苦手とする分野に対しては、オンデマンド配信や学習支援ツールをより充実させるこ

とが改善点として挙げられる。

- 3つの実習施設で実習を実施したが、実習施設までの距離や移動方法等が異なることから、費用負担等の均質化を望む声があった。金銭的なことは不満の元になりやすいため、今後、臨床実習全体での議論が必要である。
- リアルタイムの講義に加えて、講義の動画をオンデマンドで配信していることは学生から高い評価を得ている。
- レポートの一部を生成 AI で作成した可能性のある学生が数名いた。次年度はオリエンテーションで生成 AI を用いて作成したレポートは不正行為にあたることを話し、注意喚起を行う。

4. 授業評価の分析

4. 1 学生による授業評価

4. 1. 1 授業評価の実施率と学生による回答率にみられる特徴

令和6年度に開講した全科目が授業評価アンケートを実施していた。学生による授業評価の回答率は全体で48.9%であり、昨年度の54.3%から5.4ポイント低下したものの、約5割を維持した。特に、実験56.9%、講義56.1%であり、これらの授業形態の回答率は5割を超えた。

これらの結果は、授業改善に対する教員の使命感と学生に授業評価の重要性が定着してきた結果を示している。教員と学生双方が、授業評価の意義を意識したことにより、授業評価アンケートの実施率は高く維持され、教育の質の向上に役立っている。一方で、実習や演習において回答率が低下した背景には、実習終了時期とアンケート実施時期の乖離や、授業時間内に十分な回答時間を確保しにくいことが影響している可能性がある。

令和7年度に向けては、引き続き、学生による授業評価の回答率のさらなる向上を目指し、目標達成に向けた具体的な働きかけを継続していく必要がある。学生と教員双方が授業評価のプロセスに積極的に関与し、その成果を教育の質の向上に結びつけることが、本学の学部教育の質保証に向けた重要課題の一つである。特に「実習」という形態を持つ授業の場合、実習終了直後に授業評価を依頼したり、依頼時の言葉かけを工夫したりするなどの対応をしていく。

4. 1. 2 授業評価の得点について

令和6年度の授業評価得点に関する報告では、授業の各種評価項目に関するデータが示され、学生の授業に対する満足度や学修活動に関する評価の詳細が明らかにされた。

図1から図3は、項目⑨（満足度）の平均値が、教養教育科目4.24、看護学部4.25、診療放射線学部4.43といずれも4（満足できた）以上であることを明らかにした。これは、本学の開講科目に対する学生の満足度は概して高く、授業の内容、教材や手法が学生の要望に当たっている可能性を示す。

学生の授業に対する満足度は、COVID-19 感染拡大による大きな影響を受けた令和2年度以降、変動はありつつも、それ以前の水準とほぼ変わらない。令和2年度から令和4年度までは、対面授業を実施できない期間を含んでいた。令和5年度から通常授業が実施できるようになり、平均値は安定した。これは、授業の正常化が学生の満足度向上に寄与した可能性を示している。

また、表4は、項目③（自己学修時間）の得点が、教養教育科目2.5、看護学部3.3、診療放射線学部3.5となり、全体の平均値は3.5であることを明らかにした。さらに、図4は、COVID-19感染拡大による大きな影響を受けた令和2年度以降、変動はありつつも、ほぼ同じ水準を維持している現状も明らかにした。令和2年度、多くの科目がオンライン授業を導入し、学修支援システムmanabaを通したレポート課題の提出等を課すようになった。その結果として、自己学修時間は令和元年度のそれと比較し、全ての科目区分にて延長した。以降、この水準を維持している。

さらに、項目⑦（自己学修時間を促す工夫）の得点は、教養教育科目3.98、看護学部の専門基礎・専門科目4.29、診療放射線学部の専門基礎・専門科目4.27と概ね4（自己学修を促す工夫がされていたと「思う」）以上であることを明らかにした。これは、令和2年度以降、教員による自己学修を促す工夫が積極的になされていると学生が知覚しており、このような工夫が自己学修時間に影響している可能性を示した。

しかし、項目③（自己学修時間）の全体平均3.5は、1時間程度から2時間程度/週であることを意味し、学生の自己学修時間は決して十分とはいえない。

以上のとおり、多くの科目が学生の要望に応える授業の内容、教材や手法を取り入れている反面、自己学修時間の確保にはさらなる工夫が必要である。今後も、ICTツールの活用を含めた教授方法の革新や、授業の中に少しでもアクティブラーニングを取り入れ学生自身が考えるような授業展開、ルーブリックの開発と活用などの教育手法の導入にも積極的に取り組む工夫が求められている。

4. 1. 3 学生の自由記述について

令和6年度の授業評価における「学生の自由記述について」では、学生たちは「この講義（または演習、実習、実験）の良かった点、改善点について、具体的に記入してください。」という質問に答え、学生の視点からの具体的な意見や感想を提供した。多くの学生が授業の具体的な改善点や、教材の利用方法、教員の教授法について積極的に意見を述べた。その中で、特に注目されたのは、学修意欲や理解度の向上を促す授業方法や、学生の興味を引き出す教材や手法の使用であった。例えば、「具体的な例と結び付けて授業を行った点がよかった」「実際の疾患体験、家族のDVDや排尿日誌といった、自分たちが体験してみることが理解につながる」「講義の動画がオンデマンドで配信されていたため、テスト前の復習に役立った」「答える人を一人にしない感じがすごく良かった」といった肯定的なフィードバックが多数見られた。また、学生にとって分かりやすく、具体的な学修ができるよう配慮された教材や手法の選定など、教員の工夫と努力に対する評価も高かった。一方で学生は、授業展開の速さ、授業時間の過剰な延長、不公平感を抱かせる評価などに関する改善要望も挙げており、授業の進行速度、授業時間の適切な管理、評価の透明性確保など具体的な改善点も見出された。

令和6年度は、授業方法や教材や手法の選定に関する教員の創意工夫、改善がみられる一方で、学生の要望するさらなる改善が挙げられた。具体的には、授業展開の速さ、授業時間の過剰な延長、不公平感を抱かせる評価などに対する改善要望である。教員は、授業の進行速度、授業時間の適切な管理、評価の透明性確保など具体的な改善を求められている。また、授業中の学生と教員の相互行為のあり方も重要であり、このアプローチによって学生と教員間の目標達成に向けたコミュニケーションが生まれる。教員は、授業目標を達成すべく、最適な教材や手法を選定し、

それに適した学生との相互行為を展開する必要がある。これらを通じて、学生が主体的に学修に取り組んでいけるよう、支援することが重要である。

これらの自由記述は、個々の授業や授業担当教員に対する評価にとどまらず、本学全体の授業運営や成績評価の在り方を再確認するための重要な示唆を含んでおり、FD活動や学部内での共有を通じて組織的な検討につなげていくことも必要である。

4. 2 教員による授業評価報告書について

教員による授業評価報告書は、学生からのフィードバックを基に、教育の質の向上と学修効果の最大化を目指し、授業の改善に役立てるための重要なツールである。令和6年度の授業評価報告書は、教員による客観的な自己評価の機会を提供し、学生の授業に対する理解度、授業の目標達成状況、授業への取り組み、自己学修への動機付け、および授業に対する満足度を、学生の視点から分析することができる。

表6によると、教員による授業評価報告書の提出率は97%と、従来同様に高い水準を維持した。特に看護学部では100%の提出率が達成された。この結果は、授業改善に対する教員の使命感と教員の中への授業の自己評価の重要性が十分定着してきた結果を示している。

授業評価報告書の内容では、学生の授業評価を踏まえた教員の感想や工夫された授業方法の評価、総合的な授業評価と改善点に関する記述が含まれている。具体的には、課題図書とループブック活用による学修習慣の修得支援、理解促進のための演習時期の調整、講義の動画のオンデマンド配信による復習環境の整備など、学生の学修体験を豊かにするための多様な試みが行われている現状が明らかになった。

改善点として、成績が低迷している学生への支援の工夫、オンデマンド配信や学修支援ツールの有効活用、ペアやグループワーク機会の追加など、学生の学修環境をさらに充実させるための提案が多数記載されている。同時に、学生が自らの自己学修に気づけていない可能性を指摘し、学生が自己学修していることを自覚するための支援の必要性も挙げられた。同様に、一部の学生が生成AIを用いてレポートを作成した可能性を指摘し、生成AIを活用したレポート作成は不正行為であると学生に分かるよう伝える必要性も挙げられた。

これらの努力は、教育の質をさらに高め、学生にとってより良い学修環境を提供するためのものである。令和6年度の教員による授業評価報告書から得られた知見は、今後の授業改善に向けた貴重な資料であり、教員と学生の両方にとって有益なものである。教員の創意工夫と学生の積極的な参加により、より効果的で満足度の高い授業の実現に向け、努力を継続する必要がある。

5. 令和6年度におけるFD部会・委員会の活動について

FD関連組織は、令和5年度より内部質保証委員会の下部組織として改組され、授業評価に基づく迅速な改善対応が可能となった。また、学部ではFD部会が設置され、大学院では研究科専門委員会の一つとして研究科FD委員会が位置づけられている。

FD部会では、非常勤講師を含む教員に対して、授業科目ごとに、学生による「授業評価アンケート」の実施を依頼した。その結果を踏まえ、担当教員は、自身の授業に対する評価と改善点を「教員による授業評価報告書」として作成した。アンケート集計結果については、IR部会で分析を行い、FD部会で全体の結果を取りまとめ、「授業評価報告書」として作成した。

令和5年度の授業時間有効活用の課題については、令和6年度の学生の評価や自由記述から、課題は改善されていたと確認した。また、学生の自由記述と教員の授業評価報告書を照らし合わせ、学生の希望とそれに対する教員の対応、学生の希望が妥当であるかを確認した。

さらに、FDに関する教員研修会の企画・実施を行った。

本年度は授業評価調査を開始後15年目となった。平成29年度よりmanabaを用いた調査を導入し、平成30年度及び令和4年度と6年度にはアンケート内容の一部が変更された。これにより、授業の改善点は学生の自由記載内容により明確化され、教員が授業改善の具体的な施策を検討・実施する際の参考資料として活用されている。令和4年度より新カリキュラムが導入され、アンケート内容の変更が授業改善にどの程度影響を及ぼしているかを検証し、改善策の妥当性を評価するため、今後も継続してデータを蓄積し、その推移を分析・評価していくことが必要である。また、令和6年度のアンケート回収率は前年度54.3%、今年度48.9%と減少している。実習の回答率が減少していることが影響している。質の高い教育内容を提供するためには、さらに実習において、教員による声掛け等を行い、アンケートの回答率を高め、多くの学生からの評価を得て、授業改善に反映できるよう、継続して努力をしていく必要がある。

学生による授業評価と教員の授業評価報告書双方において、manabaやTeams等のICTを活用した教授方法や教材活用が、学生の事前・事後学修への取り組み意欲を高め、授業内容の理解を促進する効果がアンケート結果や授業評価から明らかになった。次年度以降も、引き続きmanabaやTeams等のICTを有効活用する。さらに、アクティブラーニングなど積極的に取り入れ、学修効果の向上にむけた創意工夫のある授業展開が必要である。

大学教育の目的は、教育・研究を通してディプロマ・ポリシーを満たす学生を育成することである。組織的な教学マネジメントの実践においては、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを基盤とした学修目標の具体化や、学修成果・教育成果の把握・可視化、FD研修会の実施等により教育課程の質保証を行っている。各科目の成績評価は平成30年度から成績評価ガイドラインが施行され、令和元年度より正式に運用が開始された。GPAで数値化された成績評価結果は、成績評価の透明性と公平性を高めるとともに、学修成果の客観的把握を目的として教員にもフィードバックされ、年度ごとの成績評価分布が成績に利用されている。FD部会では各教員の成績評価を確認し、受講学生のほとんどをGPA4.0に近い評価をした教員に対しては、本学の成績評価ガイドラインの主旨を再度説明し、適切な評価基準になるよう働きかけている。また今後は年度ごとにSD（標準偏差）の変化を集計・分析し、経時的にモニタリングしていくことで、その効果を判断していく必要がある。

本学は大学院生を対象にティーチング・アシスタント（以下、TA）制度を導入している。TAは講義や演習、グループワークなど教育の一端を担っており、その役割も大きい。大学設置基準の改正も踏まえ、令和6年度の実施を見据えた取り組みとして、令和5年度にTAが関わる授業において、教育の質の維持及び向上ができるように、TAの役割や学生への対応等に関するガイドラインを作成し、令和6年度には入学式後のオリエンテーション時に研修会を実施した。

以上のように、授業評価結果に基づく授業改善・向上のみならず、学修成果の把握・可視化、適正な成績評価等を組み合わせた検討を継続することにより、本学の教育・研究の質向上にむけた課題の明確化と改善への取り組みが必要である。

6. まとめ

本報告書は、学生による授業評価および教員の自己評価を基盤とし、本学における教学マネジメントおよび内部質保証サイクル（PDCA）の一環として、授業改善と教育の質向上を組織的に推進するための基礎資料である。

令和6年度を通じて、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを基盤とした学修目標のさらなる具体化と、学修成果・教育成果の把握・可視化に重点を置いた活動を展開した。特に、FD研修会の積極的な実施や、教育課程の質保証に向けた取り組みが、学生及び教員の成長と発展に寄与した。研修会では、認証評価受審を機会とし、「認証評価の理念と大学教育の質保証」を行い、受審の必要性や評価視点を教職員で共通する機会となった。また、「大学における障がいのある学生への修学支援－合理的配慮とは－」を行い、合理的配慮が必要な学生に対する基礎的な理解を深めることができた。これらにより、教員の教育力の向上につながったと考える。

授業評価の分析においては、令和6年度における学生による授業評価の実施率と回答率は、前年度に引き続き高い水準を維持した。これは、manabaなどのシステムを活用し、教員と学生間のコミュニケーション強化や、リマインドメールの効果的利用、調査期間を単位認定試験後まで延長し学生が回答しやすくなるなど、多方面からのアプローチが功を奏した結果である。授業評価得点に関しては、自己学修を促す工夫が施された講義の評価得点が、全体的に学生の満足度を反映する形で高く評価された。これは、授業の内容や教授法が学生のニーズを満たしていることの証であり、特に実習や実験に関連する授業では、学生の積極的な学修活動が評価された。また、学生の自由記述からは、授業方法や教材選定における教員の創意工夫が高く評価される一方で、授業のペース調整や教材の視認性の向上など、さらなる改善の必要性も示された。教員と学生間のコミュニケーションの改善や相互作用の促進が、教育環境の向上に寄与することが明らかになった。令和5年度の教員による授業評価報告書からは、教員が授業の質を維持し、向上させるための努力を継続していることが示された。また、学生からのフィードバックを基にした授業改善の試みが、教育の質をさらに高めるための重要な手段であることが確認された。FD部会・委員会の活動においても、授業評価の実施やFD教員研修会の企画・実施を通じて、教員の教育スキル向上と学生の学修効果の最大化に貢献した。

以上の取り組みを通じて、令和6年度は、学生及び教員の学修成果と教育成果の向上、さらには大学教育全体の質の向上に継続的に寄与した年であった。授業評価の実施率と回答率の改善は、学生と教員が共に教育過程に積極的に関与し、その質を高めようとする姿勢が浸透していることを示している。また、授業評価得点や学生の自由記述から得られたフィードバックは、教員による授業内容の見直しや教授法の改善に直結し、教育の質向上に貢献している。令和6年度に向けては、本年度の成果を踏まえつつ、さらなる教育の質の向上を目指す必要がある。授業評価の回答率向上に向けた取り組みはもちろん、学生の自主学修を支援する教授法の開発や教材の改善、学生と教員間のコミュニケーション強化を通じた学修環境の整備が重要である。特に、学生の自己学修時間の確保とその質の向上、学生の学修体験を豊かにするための教材や授業方法の改善は、継続した大学教育における重要な課題である。実習等の知識や技術は学生自身による自己学修が必要であり、その必要性を学生に丁寧に説明する。また、教員による授業評価報告書の分析やFD研修会のさらなる充実を通じて、教員の教育スキルの向上と学修効果の最大化を図ることも求め

られる。ICT ツールの活用を含めた教授方法や、授業の中にアクティブラーニングを取り入れ学生自身が考えるような授業展開、ルーブリックの開発と活用などの教育手法の導入にも積極的に取り組み始めている。

最後に、授業評価システムの有効活用とその結果のフィードバック機能の強化により、学生と教員が互いに学び合い、成長できる環境を維持・発展させることが、令和7年度及びその先の大学教育の質の向上につながる。大学教育の目的は、教育・研究を通じて社会に貢献する人材を育成することであり、そのためには、教育の質の継続的な向上が不可欠である。教育の質向上には、FD 研修会のみならず、ベストティチャー賞授与式後に行われる授業方法の発表も効果的である。研究部会や両学部 FD 部会、両研究科 FD 委員会等と連携し、各年度の方針や内容を共有していく。FD 部会において、各部会や委員会の研修会の内容を把握し、その他必要とする研修会を FD 部会で計画することにより、さらなる向上が期待できる。そのため、このような連携を強化することが今後の課題の一つである。今後もこの方向性を継続し、さらなる教育の質の向上を目指していく。